

「HSK 季刊わたぼうし」 第47号

発行者:わたぼうし連絡会  
発行日:1999年(平成11年)6月1日 '99 春号

第47号のテーマ 「私の外出体験 I」

この機関紙は障害のある人、ない人が自由にそれぞれの考えを出し合い、主義・主張を超えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

## テーマ・私の外出体験 I

久しぶりにテーマコーナーの復活です。今回より数回、障害者の外出について考えたいと思います。これを土台の紙面として、内容の濃い紙面にしたいと思っております。どうぞご意見をお送り下されれば幸いです。インターネットのEメールでもご意見を受け付けます。

### 「行きたいところに行きたい時間に行ける」ということ

ハート・サイド・ネットワーク副会長

車いすの人と外出するようになって、もう20年くらいになります。20年前の大阪は一部の車いすの運動家を除いてはほとんど街へ出かけませんでした。それが、そういう運動ではない車いすの人たちが街へ出始めた頃です。車いすを押すのは講習を少し受けたという人がほとんどです。私もその講習を受けずに、全くぶっつけ本番という形で、Oさん(現在、「障害者自立生活援助センターとよなか」の中心で活動している)を豊中の自宅まで、地下鉄・阪急電車を乗り継いで送って行きました。

その後、大阪では公共の交通機関を使って外出する形で、活動が広がっていきます。反対に東京ではこの頃からハンディキャブを使って外出するという形で活動が広がっていきます。最近移送サービスが全国的に広がっていますが、大阪で移送サービスを活性化しようとしている人が、障害を持つ人があまり積極的に動いてくれないと嘆いていました。私の車いすの昔からの友人に言わすと「電車に乗ったら良いやん。車なんか、めんどくさいで」と答えが返ってきます。交通事情の違いが、外出のスタイルを変えています。

それでは石川県ではどのような外出スタイルが考えられるのでしょうか？。やはり、公共交通機関がJRとバスだけなので、ハンディキャブを使うのが、良いと思うのですが、あまりそこに偏るとJRバスの障害を持つ人への対応が発展しない可能性があります。

そのあたりを視野に入れながら、ハンディキャブの移送サービスを各市町村に作っていかねばならないと思います。

「行きたいところに行きたい時間に行ける」。これは人間の欲求として当たり前のことです。その当たり前のことを実現するのが移送サービスだと思っています。そのことを障害を持つ人たちが「自分の声で発信していく必要があります」。福祉サービスを受けるのではなくて、自分たちの声で作出すという気持ちで活動しなければ、いつまでも、「籠の鳥」です。

## 車いすのままバスに乗れる

### AJU 金沢車いすセンター事務局

朝起きて、カーテンを上げながら窓の外気に誘われるまま「お父さん～お天気もいいし、体調もいいから、お買い物に行く～う」と隣の部屋にいる主人に弾んだ声をかける。

「そうやな、バスの時刻表見てみや」。車いすのまま乗れるバスが金沢市内の平和町～金沢駅路線に走り出してからの夫婦の会話です。

また、こんな日もあります。「市役所まで行って来ま～す」とバス停まで行き、バスを待っているうちに気が変わり、川沿いを歩き繁華街を抜けて市役所まで。電動車いすのバッテリーの残量を見ながら歩き回って帰りはバスに乗って家路へ……。

こんな風に日常のリズムによって外出方法が制約なく、決められることのなんと快適で楽しいことでしょう。いろいろな移動方法ができ、生活の範囲が広がりました。

バスの中では顔見知りの人と乗り合うこともあり、出会いも楽しみの一つです。

ところでバス停って寒いですね。こんなに寒いところでバスを利用する人が待っていたのかと、体験してしみじみ思いました。以前、初めて車いすで横断歩道の信号待ちをした時、大型車が横切る風圧に驚いたことや自動車がこないと渡ってしまいたいと思ったことを思い出しました。

車いすを足として外に出るようになってから重度の障害を持つ私もいろいろな体験ができるようになったのです。とてもうれしいことです。

でも、重い障害を持つ車いすの人の移動問題。その歴史を振り返れば全国に波及したタクシー割引制度から始まり、「ほほえみの石川大会」の年によく車いすのままに乗れるリフト付きタクシーが金沢市の助成で運行され、バスに乗れるここに至るまで20年あまりが過ぎているのです。

障害を持つ人が暮らしの中で求めることは、いつの時代も変わらないものであったことを、決して忘れないで利用したいと思っています。金沢の町にバスが走る。

それは移動手段のない車いすの障害を持つ人にとっては長い間の悲願でした。車いすの人も乗れるノンステップバスが走ることは、他の移送サービスよりも困難なことであったと思います。

バスを走らせることに携わった人々の熱い思いを感じます。だからこそ大切に利用した。そして、私はバスに乗るたび「〇〇さん、今バスに乗っているんだよ」と今は亡き友を偲びバスの人混みにまみれ続けていきたい。

ノンステップバスの路線が皆さんのバス停で利用できることが一日も早くなるために必要性を声に出し続けませんか？自分のためにみんなのために！

## お知らせです

日本財団より福祉車両「夢ふれあい号」の寄贈を受けました。近々、移送事業を開始する予定です。

問い合わせ先：「AJU 金沢車いすセンター」(076)243-2774

## 障害者の外出とボランティア活動

## 匿名希望

今は国を挙げて、皆さんもご存じのように福祉関係が見直されている今日、この頃です。私も障害者の一人としてこの福祉プランに大歓迎ですが、今度の平成12年度からの介護保険の場合は、いろいろとテレビやラジオ等に毎日、介護保険の内容の説明があり、何とかそれなりに理解することができましたが、私等の障害者のプランにおいてはテレビ等の放送もなく、何か取り残されたような気がして残念です。しかし、まだ国会にも障害者の案も出ていない状態です。

今、私たちの一番望むことは、外出することです。私の施設には150人の利用者がありますが、殆どの利用者は介助を要する人たちです。また、その中でも、自立で外出して楽しい時間を過ごしたいという人たちも多くなってきました。私もその一人です。他人の介助がなくしては外出は不可能ですので、つい、行きたい所もありますが「ぜいたく」と思いあきらめてしまいます。でも、最近になってボランティア組織の活動があると聞き、社協のボランティア係にお願いして、生まれて初めてボランティアにお世話になり、感謝をしています。

最初は初めての人に介助をお願いするのも不安と心配でしたが、会ってお話しできて本当によかったと思います。そして、来ていただいた人たちも高齢者で少し障害があると聞きました。自分が障害を持ちながら、私たちの車いすを押してくれたことと、残された短い人生の大切な時間を割いて、私たち三人の介助を最後まで見ていただいたボランティアに感謝します。

私は今、外出するときは殆ど社協のオリーブの会にお願いをしています。私が利用している施設の利用者の中でも、どこに電話をしてお願いしてボランティアを頼んだらよいか、分からない人たちがたくさんいます。また、知っていても「不安です」という人もいますが、そのような人たちに「一回お願いして自信をつけたら」と言っています。そうして、自分から進んでバリアを壊し、地域社会とのつながりを目指すことが大切だと言っています。一回ボランティアをお願いした人たちは本当に助かりましたと、喜んで、また、お願いして行きたいと自信をつけています。

今は、私はボランティアと入所者の仲人のような橋渡しをしながら、少しでも多くの皆さんに外に出て楽しい時間を過ごすことを願っております。

## 障害があっても世界を見て歩こう

最近、障害者の社会参加が広がりや高齢化に伴い、弱者に気を使った「福祉関連ツアー」と呼ばれる海外旅行が急速に増えている。車いすでの障害者の海外旅行は、ここ4,5年で大変な人気と聞いております。また、最近、近畿日本ツーリストは、3年前から「バリアフリー海外旅行」の名で障害者を対象の旅行を売り出しているそうです。経済的に余裕があれば参加したいと思います。また、海外ではなくても国内での楽しい旅行を心配なく、楽しめるバリアのない素晴らしい未来の来ることを障害者として祈っています。

## 私の外出体験

## 地域住民・肢体障害

私の住んでる集落部で、乗用車のないのは我が家ぐらいのもの、生活上、外出はバスに頼っているが、路線も少なく、不便な面が多い。だが、幸いにも食品だけの買い物は、部落内である店ですむことから、時間の無駄もなく、助かっている。

しかし、役場、銀行、郵便局といった公共施設となれば、どうしても、ひとバス出なければならぬ。また、時には読みたい本もあり、書店へ行きたいこともある。

が、私は初め地元で二軒しかない、本屋さんの場所を知らなかった(幾度となく、人の車に来てはいても、なかなか覚えられない、まさに、道音痴?)と、いって、"人に聞いてでも行こう"と努力しなかった頃。かくて口ずさむことは「店が近かったら」とばかりでした。

けれど、そんな時に役立ったのが、商工会青年部から発行されている「志賀町テレホンガイド」に記載されてある"住宅地図"だったのです。ページをめくって、いらぬ広告紙の裏に一部を書き写して、外へ持ち出した日が何度あったか。目的地まで歩いて行くには、少し勇気があるが、辿り着けたときのうれしさは、何とも言えないもの。

さらに、ある時は重なるように、当地から国道が見えたのに驚いた私は「ここなら、あの店へも直ぐゆけるはず、歩いてみよう。」という気持ちを胸に、先へ進んでみたことがあった。そして、前進するにつれて、某店が見えてきた時の瞬間は思わず「そうかこんな近道あったんだ……」と緊張していた顔がゆるむのを自分でも感じることもあった。それだけに新しい通路を知ること、喜びの一つだと思うのですが、みなさんは如何でしょうか？

## 編集者より

## 肢体障害・障害者支援施設・利用者

今回のテーマは、「私の外出体験」について意見をいただきました。私もいろいろ外出時には工夫が必要です。途中でトイレに行くのが難しいので紙おむつをあて、言葉が不自由なので用件をメモに書いて行くようにします。なかには、スプーン、フォーク、ストローなどを準備して外出をしている人もいます。

さて、外出をするときに問われるのは、障害者側のモラルです。行き先でトイレ、食事の介助を依頼するということがあります。介助を依頼するときに、相手を選ばずに誰にでも依頼しても良いのでしょうか。例えば、レストランの店員さんに食事の介助を頼んだり、デパートのお客さん、店員さんにトイレの介助を依頼してもよいのでしょうか。外出先では入所施設ではなく、社会のルールが必要だと思います。

私も外出時においては、おむつの交換、食事の介助などを依頼したいと思うことがありますが、まだ一般社会においてはそこまでバリアがフリーになっておりません。

障害者の社会参加の機会が増えましたが、誰に頼んだらよいか、言葉づかいなど、社会のルールを考慮しないといけないと思いますが、読者の皆様のご意見をお聞かせ下さい。

## みんなの広場

「"差別"というものは"エゴ"からくるもの……。」

肢体障害・障害者支援施設 利用者

我々、障害者にとって、いや、人にとって、“差別”という言葉は、より醜いもので、尚且つ残酷なものである。

だから人間、誰もが「差別してはならない。」とか「差別するものは寂しいものだ。」と自分自身に言い聞かせている。が、実際はちょっとしたことで“差別”みたいなことをしてしまうものである。例えば、人が自分と違った意見を述べたり、違った装いをしたりすると、自分とはルールに反していると思い、その人のことを無視したり、避けたりする。また、自分の意見に同意しなかった人がいたりすれば、陰で悪口を言ったり、その人のことを悪い印象づけたりもしてしまう。こんな文章を書いている私自身も、そんなことをした覚えがいくつかあるので、必ずしも自分のことを良い人間だとは思わないのである。

しかし、“差別”というのはどこからどこまで“差別”というのだろうか……。?そもそも人間というものは、いろんな個性や感性の持ち主だから、誰もが同じ考えを持っているとは限らないし、また、人それぞれ自分のあった好みやタイプが違うと思う。

ここで、私はこの文章を読んでいる方に質問します。「貴方にとって、嫌いな人は何人いますか？」大抵の人は「わからない」や「そんなにいない」と答えると思う。

ちなみに私自身、嫌いな人間は山のようにいるし、また、その人たちに対しては“関わりたくない”とまで思ったりもしている。別にそんな人たちと無理をして付き合っても“自分にとって得なこと”もないし、たぶん相手の方も自分をよく見ていないからね。

何故、このようなことを述べたかというと、必ずしも人間は“綺麗事”だけで生きていけないからだ。毎日のなかでさまざまな“喜怒哀楽”によって、人はいろんな面を見せていると思う。

例えば、自分の感情に押し流され、ついに相手のことを傷つけてしまったり、又相手に傷つけられてしまう。極端な話だが“人間”っていうものは弱い生き者だから、口では善い行いを述べているけれど、実際はなかなか行動にはできないのだ。だから人間は“言葉”という武器を持っているのである。

だけど、必ずしもそれが悪いとは言いきれないし、また、それが真の人間の姿といえるかも知れない。

話が途切れてしまったが、人はどこで無意識のうちに“差別”をしてしまっていることを忘れてはいけない。どんなに神を信じていても、どんなに綺麗なことを述べていても、相手は“人間”だから。

さて、世の中で他にも“差別”的なことが山のようにある。現に世界各国でさまざまな人間同士の戦いが行われており、人間同士が傷つけ合ったりもしている。例えば、人種差別（黒人と白人との違い）、また、働く女性に対しての差別問題。そして、同性愛者に対する差別問題。これらを含めて、世の中では、“差別”というものに対して、いろいろな対策が行われている。例をあげてみると、働く女性に対しての差別意識の除外と尊重。同性愛者(エイズ患者やセクシャルティー)に対する差別意識の除外と尊重。これらは皆、差

別されている側が差別した相手から何らかの方法で勝ち取ったものである。

ところが学校の”イジメ”問題については、一向に減る気配がない。この前も新聞に”どこかの学校の生徒が自殺した”という記事が載っていた。私はこの記事を見て「なんで死なあかんの」という思いでイジメをした奴らよりも、その自殺した本人とその家族に不信感を抱いていた。「何故にいじめられた本人がいつも死ななければならない？」と「何故にその本人の家族はそんなに学校ばかりに任せていたの？」という思いでいっぱいだった。これは考えてもわかることで、学校の先生というものは裏を返せば、他人同様なもので、そんな生徒のことを思う人間なんて数少ないと思う。

もしも、そんなことをすれば、今度は自分の首が危ういもの。だから自分の子どもは、やはり”他人任せ”にしてはいけないと思う。それに、イジメられ子どもとイジめる子どもが弱いのは、自分(親たち)自身の”エゴ”によるものだと思う。これは私、個人の意見だが、子どもは何らかの形で何かを得ようとしている。けれど、それを親たちが自分のエゴで摘み取ってしまう。だから、子どもは当たるところがなく、結局は”イジメ”という形に走ってしまうのだと思う。

だけど、どんなにイジメをしても、”自分の得する”ことなんてないと思うし、大人になっただけで、空しくなるものだ。もしも、イジメてる相手が嫌いだったら、そんなグループを作らないで、自分一人がその子を避けているといい。それにイジメにあってる子どもよ。そんなに落ち込まないで、そいつに言ってごらん「アンタ、僕をイジメたってなんの得があるの？」ってね。そしたら相手も引いてしまうと思う。

だから、イジメられても簡単には”死”を選ばないで、もっと大きな態度で生きて行けばいいのよ。私自身も小学校の時はイジメられていたから、今では相手がどんな人間か見抜くことができるもん。

で、私が思うにイジメをしてる奴は、心が狭いんだと思う。大人の社会にもイジメというものがあるから、今のうちにイジメにあった方が大人になれば役に立つと思うよ。この世から”イジメ”っていうものはなくならないから、要は自分自身で身を守らなくてはいけない。

そんでもって、私が思うことはタダひとつ。”差別”とは、相手のエゴからはじまるものである。だから、そんな奴らの言うとおりにならなくてよろしい。お粗末様でした。

前書き　ここに書いた文章は私の子どもの頃より、ごく最近までの私の身の回りに起こった事実だけを、元にして文章を起こしてみました。私自身してきたこと、私と父母兄弟との関わり、それに友人との付き合い、そして先輩たちに教えられたことなどを書いてみました。私にとっては先輩のなかにおいても、Tさんとの関わり方が、特筆すべきこととして忘れられません。私をこれまでに支えてくれた父母兄弟家内、そして先輩友人たちに感謝の気持ちを、込めてこの文章を起こしました。私の記憶の中にあるすべてのものを、思いだして書きました。書いていて恥ずかしいこと、このようなことまで書かなければならないものかと、思い書いています。だけど、私自身をさらけ出して、私のしてきたことなどを思いだして振り返る良い機会となりました。私の小さな記憶を便りに、書いたことですので、人名、地名その他に文章を書くに、当たり私のしてきたことや、先輩友人のしてきたことに、文章に前後したところや、間違いがあるかも知れませんが、どうかその場合はご勘弁願います。私としてはよき先輩や友人に、恵まれて幸せな半世紀を、送らせてもらいました。

私は昭和25年の梅雨の頃より泳ぎを覚えて、御祓川の河口あたりにある、清水造船の前で毎日のように雨の日も風の日も、海へ行き泳いでいました。そうしたら8月の中頃だと思いますが、私は熱を出して寝込んでしまいました。その頃私の父母たちは小さな八百屋を、始めて間もない頃と聞いています。その店先の品物を並べてある、六畳くらいの板の間に私は熱を、出して寝込んでしまいました。ここまでは私の記憶にはっきり残っていましたが、これから先の次の年の3月頃までの記憶がありません。その間、私は体温計いっばいの42度以上の、熱を出してウンウンうなっていたそうです。これから先の話は病気が治ってから、祖母や母に聞かされた話を元にして書きます。腰のあたりに床ずれができてザクロのようになり、口を開けていたと言うことでした。その痕跡は今でも腰に3個と、足のカガトに2個あります。私が42度以上の熱を出してウンウンうなって、寝ていた話ですが、私の左手は縄のように、ねじれていたという話です。私が全然意識のない時の話です。少し病状がよくなり、家の二階で療養するようになり、何か用事があって母や祖母に知らせるときは、空き缶を棒でたたいて、知らせていたことを記憶しています。その頃、私の家はまだ借家に、住んでいました。この病気の後遺症が元で、障害手帳の交付を受けました。

私はこの病気が元で身体に障害が、残り家族と一緒にまず最初に能登病院へ、行き相談しました。父母ともに私の行く末が、心配だったのです。ですから一番手っ取り早く相談できる、能登病院の先生のところへ行き、相談したのではないかと思います。だが初めの頃は病院で相談をしても、だめだということに気が付きませんでした。どこから聞いてきたのか、市役所の福祉課へ行き、相談してはどうかということになり、祖母と一緒に福祉事務所へ、行き相談しました。そこにはFさんという人が、係をしていました。Fさんにいろいろこれからどうすればよいのか相談したところ、懇切丁寧に教えられて家に帰りました。Fさんの話によると、病院へ行き、診断書を書いてもらい、診断書と一緒に、



上半身の写真を添えて、提出して欲しいということでした。私たちはFさんに教えられたとおりに、診断書と一緒に上半身の写真を、添えて提出しました。身体障害者福祉法が、制定されたのは昭和25年だと、私は聞いています。書類を提出してから2～3ヶ月ほどして、障害手帳が私の手元に届きました。私が障害手帳の交付を受けたのは、昭和28年の、夏頃だったと思います。ですから私の障害手帳の、受付番号は2000番代だったと思います。Fさんとは、その後長くおつきあいをして、いただくことになりました。私も市身体障害者福祉協会の、総会などがあると、出席しました。まだ、子どもで総会に出てみても、何を言っているのかも、分からないときによく、Fさんに誘われて、出席しました。Fさんはその後市役所を定年退職になり、消息が私に、分かりませんでした。私が市役所の駐車場に、勤めていた頃にY君が、私に教えてくれました。何かの世間話をしていて、そのついでに昔世話になったFさんの、話が出てY君が今は羽咋の妙成寺にいと、私に知らせてくれました。私はその後何回か、妙成寺へFさんに、逢いに行きました。私は寺に着き、Fさんを捜しました。Fさんは寺の、受付のようなところにいました。そして墨衣を着て、座っていました。私の顔を、見つけて懐かしそうに寄ってきて、「元気になっているか」と言ってくれました。私はFさんにも会えたとし、妙成寺の五重塔もみたとし、その中にいた大仏様も初めて拝んだと、満足して家路に着きました。このことは私が駐車場に勤めて、車の免許を取ってから2～3年後、ことだったと思います。車の運転免許を取ってから2～3回ほど羽咋の明星寺へ行き、Fさんに逢いに行きました。私は昭和20年、つまり第2次世界大戦が始まる前の年の、2月にこの世に、生を受けました。その頃の両親は、小さな八百屋を初めて、間もない頃だったと、私は聞いています。私が生まれて2年ほど、してから父に召集令状「赤紙」が、来て金沢の第9師団へ入隊しました。

## 特殊教育の現場を去るにあたり

## 地域住民・元養護学校教員

肢体不自由養護学校一県一校設立運動の気運の高まりつつある時期に、教員加配で配置されたのがこの教育との出会いでした。

重度の脳性麻痺児も含めて20数名の一年生を一人で担任し、保護者の方が二名ずつ介助の役で教室内に待機していました。さながら毎日が授業参観日でした。現在の現場では考えられない状況でした。でも楽しかったね。

その時の一人が本「HSK季刊わたぼうし」編集委員のOさんです。「あの善ちゃんが立派になってー。」教え子の成長を喜ぶと共に、原稿依頼も断るわけにはいきませんでした。

肢体不自由児の母子二人三脚の姿には、唯々感服でした。異口同音に「この子と鉄道に身投げしようか？海に飛び込もうか？と何度思ったことか？この子の笑顔に励まされて生きてきて良かった」ーと、死ぬほどの悩みを通り抜けてきた母親の頼もしさと尊敬の念を感じました。知的発達遅れの児童には、純な心と人間の本性を見抜く心に感服しました。

最後の二年間、思いがけず盲学校へ。視覚障害児・者との出会いはまた新しい体験でした。特に中途失明者の再挑戦する真剣な姿に、無事社会復帰をと祈りを込めて接する毎日でした。教職38年間を縁ありて特殊教育に携わり「生きる力」を育み、教えられ、喜怒哀楽を共にした障害者の皆さんに感謝します。そして皆さんの住みやすい社会になりますように。

## 今私のやりたいこと

## 地域住民・肢体障害

私は脳梗塞という病気になって、もう十三年になります。18歳から28歳まで東京にいて、何もわからないまま七尾に来ましたが、心は全く灰色でした。

青山彩光苑でリハビリを兼ねた仕事をして、約一年半通いました。雨の日も、雪の日も、夏の暑い日も、青山彩光苑に向かって23分、帰りも23分、それを彼が見ていたかどうか分かりませんが、七尾バスの運転をしている彼と、4年半前に結婚しました。

今は、一日おきに買い物に行ったり、パッチワークをしたり、家で英語とスペイン語の勉強をしたり、主人と金沢へ映画を見に行ったりと、すごく楽しいです。

4月には、また、バスで一泊泊まりで信州へ行く予定です。それでもまだ私は、半分以下なので、これからも、もっともっと頑張るつもりです。

## 青山彩光苑・福祉なんでも相談

### 地域で、あなたと暮らすために

相談は無料。身体に障害を持つ方及び高齢の方とそのご家族のいろいろな相談にお応えします。

### 当相談室では

障害を持つ方とそのご家族が安心して、地域で暮らせるように相談、援助をいたします。

### 例えば、こんな時に……

- ★散歩に出たいが、外を歩くのに不安がある。
- ★体が不自由なんだけど仕事がしたい。
- ★家にこもってばかり、どうすればいいのか。
- ★車いすに乗って出かけてみたいなど。

お気軽にご相談下さい。

### 受付時間などは？

- ★月曜日～金曜日の午前9時～午後5時

電話 0767-57-3754 (直通)

FAX 0767-57-1531

〒926-0831石川県七尾市青山町ろ部22番

身体障害者更生援護施設

青山彩光苑

(資料提供・青山彩光苑)

マイ・ブックスルーム

## 彼岸花(ひがんばな)

林 有加著

発行／株式会社日本短波放送 定価(本体900円+税)

「ぼくはここにいるよ、ぼくはかぜになったんだよ」。このお話は、和歌山毒物カレー事件の犠牲者、林 大貴君の母、有加さんが、天国のわが子にささげる鎮魂歌です。(帯付より)

編集者もこのことをラジオで知り、買って読みました。読めば読むほど、目から涙が出るばかりで母の我が子を失った思いが伝わってきます。

## ボランティア団体を紹介して下さい。

福祉活動を行っているグループ、ボランティア団体の紹介して下さい。活動内容、紹介文を600字～800字程度にまとめ写真等を添えてお送り下さい。

## あなたのホームページを紹介して下さい。

ボランティア活動、福祉情報、障害者の生活情報、障害をお持ちの方の絵画、詩などの作品を発信している非営利を目的としたホームページを紹介して下さい。紹介文を600字～800字程度にまとめてお送り下さい。

## 編集後記

皆さん、こんにちは、久しぶりにテーマ記事を掲載することができました。皆さんの原稿のご協力に感謝します。

ここ数年、発行回数も少なく、紙面内容も低下しておりましたが、今回より定期発行と紙面内容の充実を少しずつ目指していくつもりですので、皆さんの情報提供のご協力をお願いします。この号を「HSK季刊わたぼうし」の再出発の号にしていきたいと思っています。(Z.O)